

アイルランド大飢餓研究 I. 1846年春まで

徳 永 哲

1. 序論

1845年から1848年までのジャガ芋の凶作による餓死者の数は100万人を超えていた。また、このジャガ芋の凶作がもたらしたものは単に餓死というだけのものではなかった。1847年の冬は悲惨であった。歴史的な厳しい寒さに見舞われた。荒れ狂う強風と深く積もった雪のなかで飢えた体を晒して多くが死んだ。流行性の「回帰熱」(relapsing fever)「発疹チフス」(typhus)などいわゆる「飢餓熱」(famine fever)に襲われた。また、ジャガ芋で摂取できていたビタミンCが不足して壊血病にかかった。多くが、飢えに加えて蔓延する疫病と栄養不足のために発狂し、悶え死んだのである。^①

1846年から1852年までに100万人以上が飢饉を逃れて、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリアへと流れ出した。それは「移民」といえるものではなく、現代のアジアや中近東のあちこちでうまれている「難民」とほとんど違うものではなかった。飢餓と疫病のるつぼと化した地獄のようなアイルランド西部を逃れて、貧しい人々の群れは、北アメリカ大陸などから材木や穀物をイギリスへ運んで来た帰りの空の貨物船、別称「棺桶船」(coffin ship)に先を競うように乗り込んだ。1846年は貧しい小作農民が、1847年は5エーカー以下の土地持ち小農民が海外へ逃れた。当時はまだアメリカ大陸への直行便はなく、難民は一旦リバプールへ渡り、それから、各国へ散った。そのため、リバプールの人口が25万人であったが、1847年の上半年にそれよりも多い30万人が上陸した。

船賃はアメリカまでだいたい3ポンドであった。それは当時の貧しい小

作農民にとっては高値であった。多くが心ある地主や慈善団体、あるいは親戚の援助を得て、なんとか片道キップを手に入れることができた。しかし、貨物同様に詰め込まれ、1850年以前は1カ月以上の船旅に耐えねばならなかった。旅の間、最小限度の食事と水が供給されるだけであった。時には腐った食べ物や質の悪い水が配られることもあった。人々は糞尿や汚れ物の悪臭が蔓延するなか、空腹に耐えて大陸に着くのを待ち望んだ。しかし、その多くが嵐にあい、大西洋の荒波の中に消えていった。また、沈没しなくとも、多くが疫病にかかって船底で潰えていったのである。1847年にはカナダに向かった移民の数は10万人を超えていた。しかし、その6分の1が船中か上陸して間もなく死んだとされている。^②

ジャガ芋という、食品の一種目が凶作になったすぎず、他の穀物類は正常にできていたのに、なぜこんな歴史的にもまれにみる悲惨な「飢饉」となったのであろうか。この疑問にA・L・モートンは次のように答えている。

大飢きをめぐる諸事実は、すべての伝統的な歴史家たちによってはなはなだしくゆがめられてきた。言葉の通常の意味での飢きは実際にはなかったのであって、あったのはひとつの作物、すなわちじゃがいもの不足だけだったのである。「神はいもを枯らす病気をつかわしたが、イングランドは飢きをひきおこした」とは、当時流行した言葉である。1848年、この年無数の人々が飢えと発疹チフスで死んだが、価格にして1,700ポンドの食料がイングランドの軍隊に守られてこの国から実際に輸出されたのである。この時期に死んだ150万人の人びとは、飢きんのために死んだのではなく、地代と利潤に殺されたのであった。^③

モートンの書いていることが真実であるなら、疑問は残る。当時はイギリス・アイルランド合併国となっていたのに、何ゆえ、ほんとうに何の救いの手も差し伸べなかったのであろうか。この時代になれば、イギリス人移住者や征服者の血はアイルランド人の中に混じっており、また、アイルランドとイギリスは、国民性に大きな隔たりがあるにしても、行政的には

長い間それなりに結び付いてきた歴史があるのに、何ゆえ100万人以上のアイルランド人が見殺しにされたのであろうか。その理由が少しでも明らかにすることがこの小論の目指すところである。

また、「大飢饉が神の怒りではなくむしろ慈悲であり」、「人間の愚行を無効にし、アイルランドを快適かつ豊かな土地へと変えてくれる」、あるいは「大飢饉によって、絶大に慈悲深い神の摂理と、『至上の叡知は一過性の悪から恒久的な善を引き出すことができた』⁽⁴⁾」と言い切るイギリス人の冷酷で恐ろしい見解が、飢餓の最中どこでどのように具体化されていたかを検証することはこの論の目的の一つである。また同時に小屋を追いつ立てられ、飢えと高熱に襲われ、風雨に晒されながら悲鳴をあげて死んでいった人々、犬や鼠の死骸を腐ったジャガ芋と一緒に煮て食べ、チフスにかかり、狂い死にした人々を思うとき、問題は100万人という数の問題ではなくなってくる。イギリス人の「慈悲深い」冷酷な「神」に対して届かぬ叫びをあげながら死んでいったアイルランドの貧しい人々の真実を少しでも明らかにすること、それも目的の一つである。

この小論はとりあえずそのI.として、いわゆる「飢饉前夜」(the eve of the famine)と称されている1845年の秋から翌1846年の春あたりに焦点を合わせ、人口の増加、土地問題、「胴枯病」、イギリス・アイルランド合併国政府の飢饉対策を明らかにしながらアイルランドが「飢饉」に至った因果関係を探ることにしたい。

註

- (1) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.82-93
R.Dudley Edwards(ed.), *The Great Famine: Studies in Irish History, 1845-52*. Lilliput Press. pp.263-315.
T.W.ムーディ/F.X.マーチン編著 堀越智監訳『アイルランドの歴史と風土』(論創社)p.303
- (2) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.99-110
James J. Mangan(ed.), *Robert Whyte's 1847 Famine Ship Diary*.

Mercier Press.

- (3) A.L.モートン著 鈴木亮他訳『イングランド人民の歴史』(未来社) p.378
 Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books.p.75-77
- (4) テリー・イーグルトン著 鈴木聡訳『表象のアイルランド』(紀伊國屋書店) p.38

2. 人口の増加と減少の実態

1841年に人口調査が行われ、はじめて人口8,175,124人が記録された。調査員はアイルランド警察隊のメンバーであった。かれらは未開の山岳地帯の谷へ入って行き、湖沼地域を抜けて穴蔵や泥の小屋あるいは大木の下や側溝で生存している貧民の中へ入って行って、調査した。まともな交通機関もなく、道らしい道もないアイルランドの田舎を完璧に調査するという事は不可能に近いことであったに違いない。

下記の表から、1800年から1841年まで、1年間に約100万人増えていることが分かる。1845年の飢饉発生時には、調査漏れがあったと想定し、5年間の平均増加人口50万人を加えるとほぼ900万人近くまでになっていたと推定できる。⁽¹⁾

(人口表)	1800年	約450万人
	1821年	約650万人
	1841年	8,175,000人
	1851年	6,552,000人
	1861年	5,799,000人
	1871年	4,412,000人

しかし、人口増加は何もアイルランドだけに限られたことではなかった。世界の人口は1750年には約79,000万人であったのが、1850年には126,000万人までになっている。イングランドとウェールズの人口も1801年が約900万人だったのが、1851年には1800万人にまで増えている。⁽²⁾

イギリスは50年間で倍になっている。イギリスの人口増加の原因の一

つにアイルランドからの移民があげられる。しかし、総じてイギリスの人口増加はアイルランドとは全く性質の異なるものであった。その理由としてイギリスでは産業革命の後に産業化が急速に進み、交通機関の発達も著しく、また、マスコミも発達し、都市と地域との社会的交流も盛んになり、男女の出会いの機会も増え、婚期が早まり、さらに疫病への医学的対策も進歩し、死亡年齢も上がったことなどがあげられる。特に、都市での人口が急増した。^③

アイルランドでは人口が増え始めたのは1815年まで約20年間続いたイギリス・フランスの戦争のときからである。戦争はアイルランドの農業を活気づけた。イギリスは戦争のために穀物が不足し、価格が急騰したのである。価格を押さえるために大量の穀物をアイルランドから安く買う必要があった。アイルランドの農作物の需要は高まった。そこで、利益を上げることにだけ関心があったアイルランドの地主は牧畜から農耕へ転換した。山岳地帯や沼地の開墾がなされ、次々と農耕地に変えられていったのである。^④

貧しい労働者たちが土地を求めて殺到した。しかし、アイルランド西部、南西部の新しい土地は痩せていた。それで、そのままでは穀物を栽培することはできなかった。地主はまずジャガ芋を栽培し、土地を肥やしてそれから穀物を栽培することにした。土地を求める貧しい労働者は労賃が無くてもジャガ芋さえ小屋の近くか、地主の土地の周辺に栽培し、それを労賃がわりに自由に食料とすることができるならば、喜んで飛びついた。その場合、労働者は、地主から広い土地を借り受けている借地農民から1区画の土地を借り受ける場合が多かった。こうした土地の又貸しがやがて飢餓を生み出す最大の要因となったのである。

イギリス・フランス戦争が終結するとともに穀物は余り始める。価格が下がる。そのことを案じて、合併国政府は穀物の輸入を制限し、価格を戦争時と同じ水準に保つ「穀物法」が1815年にできた。この「穀物法」はイギリスでは地主階級優遇政策として中流階級の批判を浴び、さらに1830年代にイギリスの穀物不作が続く、穀物の価格は急騰したため、

「穀物法」撤廃運動は激しくなった。この「穀物法」をめぐるイギリス国内の対立はアイルランドとは無縁であった。合併国以外からの輸入が制限されたために、アイルランドはジャガ芋をはじめ、小麦、オート麦などを生産し、イギリスの台所を賄ったのである。地主はジャガ芋さえあれば黙って働く労働者から大きな利益をあげることができた。

しかし、「穀物法」が撤廃されて、植民地同然のアイルランドが急速に自由経済、自由貿易の渦の中に巻き込まれていくことになれば、当時のアイルランドの地主の無責任な姿勢から判断して、混乱どころではないもっと悪い状況を招く恐れがあった。すでにイギリスでは小麦の価格が暴落し、地主は農耕から酪農へ転換を始めた。⁽⁵⁾

ピール首相が1846年、6月に「穀物法」を撤廃したが、イギリスでは地主の同意が得られていたのである。『イギリス史』（山川出版）には次のように書かれている。⁽⁶⁾

当時は多くの地主が商工業とつながりをもち、また排水工事や肥料投与を積極的におこなって生産性をあげる新しい「高度集約農業」を採用する者もふえていた。

アイルランドでそうした生産性をあげるために合理的な方法が急激にとられたとしたならば、どうなるであろうか。イギリスの社会を引っ張る中流階級や産業資本家がほとんどまったく存在しないアイルランドは膨大な犠牲者が出ることは目に見えていた。事実、アイルランドにも自由貿易の波が押し寄せて来つつあった。農業の急速な合理化による犠牲者は1847年から1848年、49年と増加していったのである。

1840年代に人口の増加が著しかったのは貧しい農村であった。アイルランドには、小作農民が通うような高等教育施設はなく、一定の金銭を稼げる産業もなく、人々は世界からの情報は皆無に等しく、日々石だらけの痩せた土地を見ては空腹を満たすために耕さねばならなかった。さらに病院や診療所もほとんど無かった。⁽⁷⁾

(病院、診療所の数)

ダブリン州 6, 286人に対して1

ミース州	6, 545人に対して1
ダウン州	約2万人に対して1
ロングフォード州	約2万人に対して1
メーヨー州	約36万人に対して1

表からも分かるように病院はアイルランドの農村部にはなかったほとんどなかった。メーヨー州は州の全人口に対して一つの診療所があるのみであった。病気になれば、町に住むプロテスタントのドクターに診てもらうか、薬草を煎じて飲むぐらいで、妖精が迎えにくるのを妨げるために家の戸を全部締め切って暗くするといった迷信でもって死と闘う以外になすすべはなかった。したがって、病気の死亡率は高く、特に幼児の死亡率は20パーセントを超えていた。万年貧しく、夏になる毎と飢餓と闘った。ジャガ芋が不作の時は、食糧を求めて生死の境をさまよった。貧困と飢餓は若者が生まれる前から続いており、そして若者が生まれた後も存在した。

それでも人口が増加した。その要因として慢性的貧しさが生み出す意識の問題をあげることができる。貧しいアイルランドの若者にとって、将来にその生活に変化が起こるなどとは想像すらできなかったに違いない。将来の生活設計はないまま、若い男女は結婚を急ぐ。そして、女は若くして子供を産む。そしてただひたすら産めるにまかせて産むのである。死の悲しみに生の喜びが勝るように子供を産む。こうして、死と隣り合わせの生活でありながら、アイルランドには人口が増え続けた。これはまた、アイルランド人の生命力の強さの表れかもしれない。しかし、1845年に伝わったジャガ芋の「胴枯病」の前にはその生命力も空しかった。

アイルランドの死者の数に関しては、1864年以前には誕生、死亡の届けが義務づけられていなかったため、移民や死亡不明者がかなりあったらしいが、飢饉の年には死者の数は普段の約3倍に達している。一応、1843年に国勢調査と死亡届けによって数字が出されるようになったが、飢饉時の実際の数はそれをはるかに上回ったと考えられる。⁶⁾

1843年	70, 499人
1844年	75, 055人

1845年	86,900人
1846年	122,899人
1847年	249,335人
1848年	208,252人
1849年	240,797人
1850年	164,093人
1851年	96,798人
1852年	80,112人

上の表によると「胴枯病」がなくなった1849年に多くの死者が出ている。これは奇妙な現象のように思えるが、栄養失調と疫病のために、救貧民院 (Workhouse) にいた大勢の子供や年寄りが死んだからである。また、種芋が食い尽くされていたために、夏に新しい収穫がほとんど無かったところに加えて、イギリス政府は一方的に飢饉は終わったとみなし、救済を打ち切ったために、餓死者は後を絶たなかった。さらに、追い打ちをかけるように、地主は農耕を止め、酪農へ切り替えて合理化を行った。小作農民たちは土地から追い立てられ、動物や草の根まで食い尽くされた原野をさ迷い、餓死した。

1851年から死者の数は減少しているが、人口の方も減少が続いている。この時から土地を追い立てられた農民が飢饉の時期以上に海外へ移民して行ったことを物語っている。

註

- (1) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. p.8(2) 角山栄・村岡健次・川北稔著『生活の世界歴史10 産業革命と民衆』(河出書房新社) pp.159-160
- (3) 同上。pp.166-169
- (4) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. p.29
- (5) Padraig Lane, *Ireland*. Batsford LTD. p.57
- (6) ルネ・フレシエ著 山口俊章・俊洋訳『アイルランド』(文庫クセジュ、白水社) pp.104-105
- (7) 川北稔編『イギリス史』(山川出版) pp.290-291

(8) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.86-89

Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. pp.29-30

3. ジャガ芋の普及と飢餓

ジャガ芋は、イギリスの貴族で、エリザベス I 世から絶大の信頼を得ていたウォールター・ローリー卿がアメリカ大陸に渡ってイギリスの植民地を築き、1586年に、アイルランドにジャガ芋の茎をマンスターへ持ち帰って植えたことから始まったとされている。それ以後、コークがアイルランドでのジャガ芋発祥の地となって、そこから200年かけてアイルランド全体に広まって行った。19世紀にはジャガ芋がアイルランド全土に広まり、貧しい小作農民の食生活を支えたが、また皮肉なことに、そのジャガ芋のためにアイルランド人は大きな災いをこうむることもなったのである。

ジャガ芋は痩せた土地でも栽培でき、狭い作付け面積でも他の穀物類に比べてはるかに多くの収穫をもたらす。そのためわずかな土地でも、何家族かが生活することも可能であった。しかも、ジャガ芋にはビタミンなど栄養分が多く含まれ、それに牛乳が一杯あれば人間に必要な一日分の栄養分はすべて補給できたとされている。⁽¹⁾

しかし、ジャガ芋には他の穀物類に比べて大きな欠点があった。それは、湿気に弱く、長期の保存が効かないということであった。4月から5月にかけて植えられて、早い芋の収穫は8月の終わり頃であった。収穫されたジャガ芋はピットに貯蔵された。しかし、夏の前までの保存が限界であった。6月から8月の夏季は小作農民にとっては大変厳しい苛酷な時期であった。新しいジャガ芋が取れるまでオートミールを買わねばならなかった。オートミールは、現金をほとんど手にしない小作人にとっては高価だったので飢える場合がかなりあり、夏は「夏の飢餓」として危険な時節であった。

セシル・ウッドム-スミスは夏のことを次のように書いている。⁽²⁾

夏は古い芋の所蔵が切れて、新しい芋の収穫までの谷間にあたる時期であった。6月から8月はミール・マンス (meal months) と呼ばれた。ジャガ芋が切れて、そのかわりに穀物類が食べられる。労働者は「つけ」でそれを買わなければならなかった。

保存の効かないジャガ芋の普及によって、それだけに頼るアイルランド人は飢饉の危機に絶えずつきまとわれることになったのである。

下の表はジャガ芋飢饉の実態と救済活動の実態を示す略年譜である。⁽³⁾

1728年 マンスターでジャガ芋飢饉。コークで全住民が暴動を起こす。

1739年 ジャガ芋全滅。

1770年 ジャガ芋萎縮病で凶作。

1800年 アイルランド全体で凶作。

1807年 ジャガ芋の収穫の半分が霜でやられた。

1817年 全国的に凶作。何千人もの餓死者をだした。

1821年、1822年

マンスターとコノハト地域でジャガ芋完全凶作。

ロンドンで115,000ポンド、ダブリンで18,000ポンドの寄付金が集まる。

1830年、1831年

メイヨー、ドニゴール、ゴールウェイで凶作。

1832年、1833年、1834年、1836年

ジャガ芋萎縮病のため広域にて腐る。

1835年 アルスターで凶作。

1836年、1837年

広域にて不作。

1839年 不作がアイルランド全域に広がる。飢饉状態が続き、政府の救済活動が始まる。国庫助成金制度が設立。

1841年 多くの地域で凶作。

上の表から明らかなことであるが、ジャガ芋の凶作はアイルランド人にとって欠かすことのできない食物となった1930年代に急激に増え、それ以後はほとんど毎年のように起こっている。ジャガ芋は一日4度、焼いたり、湯がいたり、ポテト・ケーキにされたり、塩やニンシで味付けして料理されていた。⁽⁴⁾

アイルランド人がジャガ芋に馴染めば馴染むほど、飢餓と間直に隣り合わせるようになってしまったのである。

註

- (1) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.15-16
- (2) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. p.36
- (3) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. p.38
- (4) Padraig Lane, *Ireland*. Batsford LTD. p.58

4. 土地問題と地主

アイルランドの土地制度は少数のプロテスタントの地主 (landlord) と、カトリックの土地持ちの小農民 (farmer) と小作農民 (peasantry) に分けられるが、小作農民はさらに幾つかの階級に分けられていた。

地主は所有地の一角に中世のお城に似せて作られた屋敷 (Castle) や邸宅 (House) を構えていたが、実際はそこに常住することは少なく、多くはダブリンやイギリスにも住居をもっていた。そのため、土地管理人 (bailiff) や地代取り立て人などが存在した。さらに農民もいくつかの階級に分かれており、地代を払って、土地を自分のものとしてある程度自由に活用できる借地農民 (tenant farmer) とその下で働く雇われ小作人 (cottier) が存在し、さらに農繁期のときだけ雇われて働く季節労働者 (spalpeens) がその下に存在した。季節労働者は時には借地農民の敵となることがあった。地主が地代を払えない借地農民に対して「追い立て」(Eviction)⁽⁵⁾ をする時には地主の手先となり「追い立て」を手伝ったりすることもあった

からだ。

オフラハティの小説『飢饉』(*Famine*)²⁾には、地主代理人チャドウィック(Chadwick)をとおして、権力と富を有したものがいかに貧しい飢えた農民たちに対して非人間的な行為に及んでいたかがリアルに描きだされている。飢饉の最中に非情な取り立てを執行し、支払えない小作人を追い立てる。また、彼はこの作品の主人公であるメアリー(Mary)の妹(Elle)を強姦し、自分の女にして異常な性欲を満足させる。しかし、村人の憎しみを買い、孤独の中で精神異常を来し、果てには暗殺される。飢饉はアイルランドをアイルランド人同士がいがみ合う、ときには殺し合う憎しみの「るつぼ」と変えたのである。

アイルランドの土地を受け継いだ地主たちの多くは、土地はできるだけ多くのお金を手に入れることのできる単なる財源と見なしていた。1842年、600万ポンドにおよぶ小作人から取り上げた地代がアイルランドから外国へ持ち出された。不在地主のほとんどがアイルランドには年に一度か二度戻るだけだった。一生に一度も戻ったことがない地主もいたということである。

不在地主は絶対的な権力を代理人の手にゆだねた。そういう地主の土地では支配者と小作人とは敵対関係にあり、小作人の生活の安定は保障されず、将来についても前向きに取り組むことができない。小作人は地主に対して反感を抱くようになり、邪魔物を見るような目で見られるようになる。また、飢えた女や子供たちは地主に物乞いをしてつきまとう。優越感と誇りがそうした邪教カトリックの貧民の中で暮らすことを許さない。そうした地主はお金を土地の改善や小作人の生活向上のため使うことは決してしなかった。彼らはイギリスのロンドンなどの大都市やダブリンに住んで、そこでお金を派手に使ったのである。そうした地主が1846年の惨状をみても深い同情の念を抱くというようなことはなかったかもしれない。貧困や悲惨さの度合いというものは、その土地にいて生活を共にしたものでないと分かるはずはないからである。常に貧しい人々の姿に、4、5年前に見た時の印象と目前の現実にとどの程度の違いを見いだすことができたであ

ろうか。

1843年合併法撤廃運動が盛んなときに、合併国政府はアイルランドの不満の根は土地問題にある悟り、そこで王立委員会(Royal Commission)を設立し、アイルランドの土地の所有に関する法とその施行にあたっての事前調査を行うことにした。この委員会はデヴォン伯爵がその長を務めたので通称デヴォン委員会(Devon Commission)と呼ばれた。デヴォン伯爵はアイルランドを隈無く歩き1100人の参考人から証言を集め、膨大の量に及ぶ報告書をまとめた。セシル・ウッドム-スミスによると、その報告書には、地主のために貧困は拡大し、借地農民への生活の保障が全くなされていないことをあげて、変革を訴えている。^③

このデヴォン委員会の報告は、プロテスタントでありながら、アイルランドの悲惨さの根本原因は地主と借地農民との間の悪い関係にある、とはっきりと断定した。アイルランドは征服された国であって、アイルランドの小作人は土地の所有権を奪われた者たちであり、地主の大半は異国からの征服者である。そういう関係の中では、イギリスに存在するような同胞意識は存在するはずはなく、領主への忠誠心なるものは存在しようがない、とアイルランドの実情を確実に踏まえたものであった。イギリス人の一方的な、強権的な見方に警告を与えるものでもあった。しかし、政府はこうしたアイルランドの土地問題に有効な解決策を見いだすことはできなかった。

そもそも、支配、被支配、あるいは略奪、被略奪の関係があるところに、支配者や略奪者が一方的に被支配者や被略奪者を相手に関係修復をしようとしても無理なことは明らかなことである。最良の解決策は支配者たることを放棄することであろう。オコンネルはデヴォン委員会を、そのメンバーはすべて土地所有者で、借地農民は含まれていないので、完全に一方的なものである、と主張した。しかし、アイルランドの土地問題は、すでに、メンバーの資格を問題にして解決できるものではなくなっていたのである。デヴォン委員会の報告は「青年アイルランド党」の1848年の蜂起や「アイルランド共和主義同盟」(IRB)結成を予感させるものでもあった。

アイルランドの地主がすべて無責任な不在地主であったというわけではない。自分の土地にいて、借地農民のために事業を興し、農地を拡大し、生活が少しでも向上できるように率先して働いた慈悲深く親切な地主も存在していた。その地主は小作人が家を作るのに奨励金を出し、家に標準規格プランを作成し、道路を拡張し、農業専門家を雇って土地や作物の改良に努力し、排水路を設置し、借地農民の土地の又貸しをチェックした。こうした地主は飢饉のさなかにも、小作人のために食物確保の努力や海外移民の援助をした。また、1846年に設立された地方救済委員会では積極的に役割を担った。小作料として小作人が納めていた穀物類を小作人に返したり、小作料を免除したりした。ティパリー州のある地主の奥さんは、町で見つけた肉やパンを全部買い上げ、小作人たちに配った、ということである。⁴⁰

しかし、救済には限界があり、生死が小さな機会に左右されたために、また必ず生じる不平等のために、こうした善良な地主ほど逆に小作人から逆恨みをかうことがあり、殺されることがあったということである。そうした悲劇の根本原因はイギリスの救済政策の貧しさであったことは言うまでもない。

註

- (1) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.94-99
- (2) Liam O'Flaherty, *Famine*. Wolfhound Press.
- (3) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. p.13
Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. pp.20-24
- (4) Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. pp.77-102

5. 1845年秋から1846年春まで

1845年6月初旬、ジャガ芋の茎は順調に発育していた。天候は乾燥し、

暑かった。しかし、中旬になって天候は突然変化した。アイルランドの天候がいかにも気まぐれであるとしても、その6月中旬の変化は異常であったとされている。どんよりと曇り、気温は上がらず、身を切るような冷たい霧雨が降り続いた。

先に北アメリカとヨーロッパ大陸でジャガ芋の収穫を全部駄目にした「胴枯病」(Blight)⁴⁾がドーバー海峡を渡ってイギリスへも入って来たことが、ピール首相のもとに報告された。ジャガ芋凶作に対する不安は、その時、アイルランドよりもイギリス国内の問題と結び付けられた。当時イギリスは失業者が増え、「穀物法」のために小麦の価格が下がらないこともあって、貧しい労働者の主な2回の食事をパンの代わりにジャガ芋にすることになっていたからである。「胴枯病」が入って来なかったならば、おそらくイギリスの労働者はジャガ芋への依存を大幅に増していたであろう。しかし、その場合、仮定の上の仮定であるが、「胴枯病」が1、2年遅れて入って来たとするならば、その悪臭と腐敗の速さによって、社会は大混乱をきたしていたかもしれない。

「胴枯病」でイギリスのジャガ芋は凶作になったが、アイルランドのように飢饉になるというようなことはなかった。オート麦や小麦などの穀物類には病気の影響が全くなかったうえに、アイルランドからは穀物類や畜産物が大量に輸入されていた。極貧の労働者であっても慈善団体や救貧民施設で施される穀物類や果実類で十分に飢えをしのぐことができたからである。

1845年8月、イギリスのケントで大規模にジャガ芋を栽培し、セールスも手掛けていたパーカー氏は深刻な「胴枯病」の実態を報じた。彼がいつものように所有しているジャガ芋の栽培地を馬車で見て回っていた。すると、全滅しているのに気づいた。翌日、別の畑を見て回ったが、やはりそこも全滅していた。彼は以前にオランダとフランスで同じ状況を見ていたので、それが「胴枯病」と判った。彼はその時すでに事の重大さを察知していたのである。この病気が全体に広がるならば「貧しい人々の多いアイルランドでは衝撃的な大災害となるであろう」と思ったということで

ある。このパーカー氏の予感は、見事に的中した。⁽²⁾「胴枯病」がアイリッシュ海を渡ってアイルランドへ来るのは時間の問題であった。

アイルランドでは夏を迎え、暑く晴れた日が続いていた。8月の始めに、天候が突然くずれた。みぞれが降り、雷がなり、大雨が降った。風に乗って異臭が漂い、凶作の前兆は明らかに感じられた。だが、それにかかわらずほとんど気にとめられなかった。芋は一見順調に育っているようにもみえた。

しかし、1845年9月中旬に「胴枯病」ははっきりとその姿をあらわした。月曜日に、ある農夫がジャガ芋を掘ってみると順調に育っていたのが火曜日にはもう腐っていた。驚異的な速さで「胴枯病」はアイルランド全域に蔓延していったのである。

早めに掘りあげて、ピットに保存していたジャガ芋も取り出してみると異臭を発して、家畜にも食べさせられない状態にまでなっていた。翌年の農繁期までの6、7カ月分の食糧の多くは腐敗した塊と化してしまったのである。

アイルランドの貧しい農民は、イギリスの農園経営者と違って、当初ジャガ芋の腐敗や悪臭の原因は何であるのか、自分たちで判断できなかった。雨とともに空から降って来たのか、地から湧いてきたのか、土壌そのものが病気に汚染されているのか、さまざまな疑問を抱いてはうろたえるだけであった。

10月になるとマスコミ誌に報告が寄せられた。カーロウ州の主婦は「掘った時はジャガ芋は正常だったのですが、煮るとそれらが発した悪臭に耐えることができませんでした」、またミース州からは「わたしはジャガ芋を湯がいて悪臭を消そうとしました。それらが体に害がないものと信じていますが・・・」というものであった。⁽³⁾ コミュニケーションと知識の不足が凶作の危機感を鈍らせていたようである。

10月までにすでに「胴枯病」は西部地区全体にまで蔓延していた。州人口の10分の9までがジャガ芋に依存しているメーヨー州はもうすでに最も深刻な事態に至っていた。その州のある聖職者はフリーマンズ・ジャー

ナルに次のような手紙を寄せた。⁴⁾

8日ほど前には完全に正常であったジャガ芋が今日は腐っているのです。このあたりは極めて悲惨な状態にあります。人々は落胆し、どの顔にも涙があふれています。

また、11月中旬、ダブリンの大司教ドクター・コーレイはすべてのカトリック教会に対して、慈悲深い神様がわたしたちの上に差し迫っている災いをどうかお避けになってくださるお祈りを捧げてくれるよう求めた。⁵⁾

ピール首相はアイルランドからの報告を受けていたが、アイルランド人特有の話に誇張があると思っている節もあった。しかし、またアイルランドの全人口の4分の1余り、すなわち当時は250万人近い貧しいアイルランド人が、夏を半飢餓状態で過ごさねばならないこともデヴォン委員会から報告を受けてよく知っていた。そこで、その年のアイルランドのジャガ芋の収穫状況および保存状態を週毎に逐一報告するように警察隊に命じた。そして、10月には「アイルランド科学調査委員会」(Scientific Commission in Ireland)を任命した。⁶⁾しかし、この委員会は腐ったジャガ芋の食べ方を指導したり、的外れのジャガ芋の保存の仕方や腐らないようにする予防手段を勧告したに過ぎなかった。

11月ピール首相は決心した。⁷⁾有効な救済策を施行するには、あらゆる種類の食べ物を輸入できるようにすべての障害を取り除く必要があると主張した。すなわち、最低限の生活に必要なすべての物に関税をかけることは永久に全面的に、完全に撤廃するということであった。要するに、「穀物法」の撤廃である。ピール首相はジャガ芋飢饉を理由にして、実現が難しいとされていた「穀物法」撤廃を成し遂げようとしたのである。

救済策として考えたのがインディアン・コーンの購入である。⁸⁾インディアン・コーンはイギリスでは食べられたことがなく、誰もその購入に関心を払わなかった。ピール首相は極秘のうちにアメリカ合衆国にインディアン・コーンを10万ポンド発注し、コークへ輸送、政府管理の倉庫に保管して年が明けるのを待った。

次いで、ピール首相はダブリンに救済委員会 (Relief Commission) を

諮問した。そして、アイルランド救済委員会がダブリンに発足した。イギリス軍の兵站部を仕切るランドルフ・ラウス卿が長となり、委員はプロテスタントが中心であったが、一人だけカトリックからロバート・ケイン博士が入っていた。救済委員会は主に食糧に関する情報の収集から始めた。イギリスとアイルランドの軍隊に蓄えられているビスケットや代替食糧の在庫を調べた。同時に、ジャガ芋の病気の進み具合に関する情報も収集した。次いで、救済委員会を受けるかたちで地方救済委員会の組織が始まった。⁹⁾ インディアン・コーンの販売と保管はその地方救済委員会にダブリンの救済委員会から委託された。

1846年の夏までには地方救済委員会は各地域に648団体が発足した。その委員会は州の公務員、貧民救済法執行官、プロテスタントとカトリックの両方からなる僧侶で構成されていた。委員たちはインディアン・コーンなどの救援食糧を売るだけでなく救済金の寄付を地主に募った。

地主の中には地方委員会への寄付に応じない者がおり、また、小作農民と不在地主の間に介在する地主代理人は責任を回避した。ダブリンの救済委員会は地主の怠慢を阻止するために寄付申し込みリストを作成するように地方委員会に指図し、申し込みを怠っている地主の名前は本部のあったダブリン城へ送られた。

地方委員会には当初全部で70,545ポンドの国庫助成金が与えられた。さらに地方の地主からの寄付金は10万ポンド以上に及んでいた。その委員会のもう一つの仕事、インディアン・コーンの倉庫の管理があったが、これが地方委員に苦難を強いることになった。1846年4月にインディアン・コーンの倉庫の門は開かれたが、無料配給ではなかったのである。無料配給はダブリンの救済委員会から厳禁されていた。

アイルランドの小作農民は極貧状態にあった。どんなに安くてもお金をほとんど手にしない農民にとって3シリングといえども高くて買えなかった。地方委員会は地方の救貧民院(Workhouse)へ入らない者への、また体が不自由で働けない者以外への食糧無料配給の厳禁が不満を募らせもした。実際は、委員にとって、判断が難しいうえに、同郷の人々の悲惨な姿

を見るに見かねて、当初規則は無視されがちであった。委員たちの中には救貧民院が一杯にならなくとも率先して食べ物の無料配給する者もあったということである。

当時、アイルランド全国にあった救貧民院の収容は10万件にすぎなかった。人数にして70万人ほどで、200万人を超える人々が救済を必要としていたのに対してあまりに少ない数であった。入所を希望して、待っていても無駄なのが現実であった。⁽¹⁰⁾

地方委員会の委員はなんとか飢えた人々に食糧を与えようとしたが、政府は絶対に食糧を無料配給しようとはしなかった。イギリスは人々に食糧を無料配給することによって市場の価格が値崩れを起こすことだけを恐れていたのである。人の救済よりも市場の安定を第一に考える自由経済の原則を徹底して守り抜いたのは、救済対策の財源を握っていた大蔵省のトレヴェリヤンであった。彼は血筋がよく、教養も高く、聖書を手放さなかった。信仰深く見える反面、アイルランド貧民の救済には関心を示そうとせず、まったく冷淡であった。⁽¹¹⁾

1846年春にはすでに食糧の買えない絶望的な貧民が倉庫に押しかけて食糧を奪ったり、地代として納められる小麦やオート麦の荷車を襲う事件が各地で発生していた。また、羊泥棒も出るようになった。政府は貧民が餓死することよりはこうした事件の発生のほうを恐れていた。政府は地主やプロテスタントの私有財産や資産が侵され、秩序が乱れることにだけ最大の関心を払っていたのである。政府は夜間外出禁止令などを出して、アイルランド貧民に対して権力による弾圧をおこなったのである。⁽¹²⁾

こうした状況に対してフリーマンズ・ジャーナル (Freeman's Journal) は1846年4月15日に次のように書いている。⁽¹³⁾

骨を覆っている肌から骨が突き出しているような形相の人々によってクロンメルの小麦製粉所が襲われた。あたかも経帷子から起き上がって来たかのような窪んだ目でじっと見つめ、この災禍の窮状をもはや耐えることはできない、あの食糧は何としてでも手に入れなくてはならないと言ってるような叫び声をあげていた。わたしたちは夏になっ

たら苦しまなければならない。国の災難は週を追う毎に増大し、激しさを増している。

1846年春、アイルランドはすでに絶望的な状況にあったが、政府は自由経済の原則を第一に重んじ、流通機構の混乱を最優先させて、救いの手を差し伸べることは断固しようとはしなかったのである。

首相がピールからラッセル卿にかわり、「自由放任主義」がさらに強調されるようになった。救済委員会の活動は1846年夏でもって終了することになった。⁽⁴⁾しかし、救済する意志はまったく無いにもかかわらず、出費だけは加算されていた。救済委員会活動終了までにインディアン・コーンの輸入のために使われた額はアメリカ合衆国から105,256ポンド、イギリスから45,923ポンドであった。売上の総額は135,000ポンドであった。また、地方委員会への助成金として365,000ポンドが給付され、368,000ポンドが貸与されていた。⁽⁵⁾

合併国政府に見捨てられたアイルランド貧民は運命の1846年夏を迎える。

註

- (1) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp. 17-20
Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.79
R.Dudley Edwards(ed.), *The Great Famine: Studies in Irish History, 1845-52*. Lilliput Press. pp.133-143
- (2) Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. p.39
- (3) Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.79
- (4) Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.79
- (5) Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.80
- (6) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.24-25
- (7) R.Dudley Edwards(ed.), *The Great Famine: Studies in Irish History, 1845-52*. Lilliput Press. pp.212-222
- (8) Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.25-29

-
- (9) Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.82
Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. pp.54-62
- (10)Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.29-35
- (11)Cecil Woodham-Smith, *The Great Hunger Ireland 1845-49*. Old Town Books. pp.58-61
- (12)Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.83
- (13)Robert Kee, *Ireland: A History*. Abacus. p.83
- (14)Helen Litton, *The Irish Famine: An Illustrated History*. Wolfhound Press. pp.36-39
- (15)R.Dudley Edwards(ed.), *The Great Famine: Studies in Irish History, 1845-52*. Lilliput Press. p.221